

少子高齢化時代の ヘルスケアとは 新しい価値観の創造をめざす

「現在の日本は世界でも類のない少子高齢化に向かい、経済にも不安があるなか、医療も流動化しています。右肩上がりの頃とは異なる新しい価値観や仕組みの構築が、いまという時代の要請であり、そのためのリーダーが必要です」

そう語る武藤真祐氏が、NPO法人ヘルスケアリーダーシップ研究会（IHLL）を設立したのは2009年。そこには、「日本のヘルスケアを、よりよいものにした」という強い気持ちがあった。

「医師が、限られた世界のなかで活躍の可能性を狭くしているのはもったいない。異なる世界の人と交流し、硬直化した価値観を手放せば、日本のヘルスケアを改革する力を発揮できるはずだ」

そのための場を提供するのがIHLLである。セミナーや研究会、合宿を行い、グループで議論を重ねる。参加者は医療者と非医療者が約半数ずつ。そこでは、「フラットな議論をすること」が鉄則だ。

立場や年齢にとられない交流からは、きっと新しい価値観やアイデアが生まれる。

だが、医療に携わる者が決して忘れてはならないこともある。そこには「死」が存在することだ。「死生観に基づく価値観は、ヘルスケアリーダーの資質として欠かせないものです。誰もがいい死を求めますが、そこに至る生を考へることなしには得られません。また家族にとっては死後の生もある。人間の生き死にを紡ぐマイルストーンが死であり、傍らでそれを助けるのが医療です」

武藤氏は、10年には在宅医療専門の祐ホームクリニックも開設。15名の医師と、社会の助けが必要な人たちに医療を提供する。

「在宅では患者さんがマスターです。私たちは、患者さんや家族がそのときどきに醸す空気を読み、よい着地点に誘導する。在宅医療は創造的な仕事だと感じています」

デスクカンファレンスやグループケア、在宅医療の研修など、地域医療における取り組みも幅広い。

「医療の基本は生活に寄り添うこと。患者さんや家族を支えるチームの一員であり、欠かすことのできないプレーヤーであることを自覚し、切磋琢磨、自己研鑽し続けることが、豊かな医療の実現につながるのではないでしょうか」。



NPO法人 ヘルスケアリーダーシップ研究会 理事長
医療法人社団鉄祐会
祐ホームクリニック 理事長・院長
武藤 真祐 氏

むとう しんすけ
1996年、東京大学医学部卒業。同大医学部附属病院などで勤務したのち、宮内庁で待医を務める。その後、米国で医師資格と公認会計士資格、MBAを取得。マツキンゼン・アンド・カンパニーを経て、2009年、NPO法人ヘルスケアリーダーシップ研究会（IHLL）設立。10年、在宅医療専門の祐ホームクリニック設立。11年には「高齢先進国モデル構想会議」を立ち上げた。東日本大震災を受け、在宅医療による被災地復興をめざす「石巻モデル事業」にも取り組む。